

援助要請行動を促進・抑制させる心理的メカニズムに関する研究

大串 悠佑

<問題と目的>

人は、悩みを一人で抱えきれなくなった時、多くの場合、周囲の人に助けをもらうことを選択するが、精神疾患については受診率の低さが示されている (Kessler, McGonagle, & Shanyang, 1994)。場合に依じた適切な援助獲得を促すためにも、援助要請行動の心理的メカニズムを明確にすることが重要である。

援助要請行動の意思決定において、ネガティブな心理的影響が抑制に作用するものの、それに関連する変数の影響が不一致で総合的理解がなされていない。問題点としては、設定状況・個人内変数の偏り、互惠性の視点のなさが考えられる。そこで本研究では援助要請行動の心理的メカニズムを明確にするために、アタッチメントを中核として促進・抑制要因の統合的検討を行った。

なお、本研究では大学生を対象として、友人への態度を測定した。大学生は、重大なストレスに直面する人々よりも援助を必要とする程度は低い。他者からの援助が少なければ、健康的な生活を営むことは困難であると考えられる。

<方法>

対象者：都市部近郊の大学生352名に質問紙による調査を行った。

調査材料：①ECR-GO (アタッチメント：中尾・加藤, 2004), ②JIDI (他者依存性：McDonald-Scott, 1988), ③援助の互惠性 (援助量, 被援助量), ④援助要請傾向, 抑制要因 (問題の重大性, 応答可能性, 自尊心脅威, 評価懸念, 心理的負債感, 援助不信)。④については4類型 (緊急場面, 日常の些細な困窮場面, 心理的サポート, 貴重な資源の提供) × 3場面の計12場面について評定した。

<結果と考察>

アタッチメントと援助要請傾向, 抑制要因の関連については, 親密性の回避との関連 (高回避と低要請傾向, 高抑制要因) が認められた。抑制要因については見捨てられ不安との関連があるものもあった (自尊心脅威, 評価懸念, 心理的負債感, 援助不信)。この影響は, 特に高不安・低回避群 (Preoccupied) に働いており, また, 同群は高い援助要請傾向, 被援助量を示すことから, 援助要請行動の意思決定時にネガティブな心理的影響を多く認知していながらも, 援助要請・受諾している傾向があることが示された。このことより道具的な援助要請 (積極的な人間関係の維持行為) の存在可能性が考えられる。

また, 場面による援助要請傾向, 抑制要因の違いが確認された。「貴重な資源の提供場面 (高抑制要因, 低要請傾向)」と「日常での些細な困窮場面 (低抑制要因, 高要請傾向)」では援助要請傾向と抑制要因の関連が一貫しているが, 「緊急場面」と「心理的サポート」では, 問題を重大と認識していながらも, 援助要請傾向が低い。援助要請行動を捉える上で, このような場面に絞って研究を深めることが重要であると考えられる。

互惠性, 他者依存性に関しては, それぞれいくつかの抑制要因との関連が認められたが, 適切な測定のための考慮が必要であると考えられる。

本研究によって明らかになった援助要請行動の心理的メカニズムについてのより深い理解が, 受診や相談に対するためらいの理解, 軽減する効果的な関わりの模索に繋がる。場面の選定, 他の抑制要因, 促進要因の考慮などの検討点を踏まえた上で, より状況や対象を特定しての理論構築が, 心理的メカニズムの解明に寄与すると期待できる。